
恋だったとはいえない

中川京人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋だったとはいえない

【Nコード】

N5170V

【作者名】

中川京人

【あらすじ】

ぼくたちはまだ子どもだった。だけど記憶が鮮明だったことをうれしく思う。その瞬間こそ、ぼくがこれまでもっとも大切にしていた光景だったのだから。

この地上に何十億の恋の花が咲いてもぼくには興味はなかった。体中の毛が生え揃うのを待ちわびていた。何かひとつでもきみに近づきたかった。

ぼくたちがはじめて出会ったとき
ぼくたちはまだ子どもだった

それは花祭りで賑わう石畳の上でもなければ
ふたつの町をもやう橋のたもとでもなかったけれど
あの日あの場所にたしかにきみはいて
そのいぶかるようにわずかにすがめた瞳は
ぼくの驚きに満ちた視線を受け止めていた

ノートに書かれなかった小さな出来事は
この世のどこを探しても見つからない
しるせなかった遠い過去の記憶は
だれにも見つからずにぼくの中だけにある

町は人であふれていた
その中できみはぼくと出会った
きみがぼくを認めて赤面するさまを
十二歳のぼくはただ茫然と見つめていた

この地上に何十億の恋の花が咲いても
ぼくには興味はなかった
体中の毛が生え揃うのを待ちわびていた
何かひとつでもきみに近づきたかった

はるか昔の はるか彼方の思い出にすぎない
そう言えよ いくらでも
そう笑えよ いくらでも
その瞬間の記憶だけをぼくは大切にしてきた
すべてを失い丸裸になって三途の川を渡るときにも
ぼくは川守に微笑むだろう
きのうのこのように覚えているよと

あるときから
ぼくはきみを避けた
ことばをつくしてきみを避けた
ぼくを守るために
きみを守るために
せめて恋というものに陥らないために
平凡な代名詞で 記憶が書き換わらないように

恋だったとはいえない
ぼくたちは子どものままだった
ぼくたちがもう会えないと悟ったときも

はるか昔の はるか彼方の思い出にすぎない
生きていることが 思い出に別れを告げる

ぼくたちはもう会えない

でもぼくは
若く鮮明だった記憶に感謝する
ぼくたちをこんな風につくってくれた
信じたくもない何かに
感謝する

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5170v/>

恋だったとはいえない

2011年10月9日09時23分発行